

2020年からの大変革期に向けての心構え

古典（先人・先哲）から学ぶ — 細井平州先生の教え —

株式会社 山西 あすなる会顧問  
代表取締役社長 西垣 洋 一

木材、住宅業界のみならず 2020 年を節目に日本は、大変革期を迎えます。少子高齢化・過疎化等の進展に伴い、新設住宅着工数減少、空き家問題等が顕在化、又、東京オリンピック・パラリンピックによりグローバル化が一層進展、日本人というブランドはなくなり「個人」の能力がより重視されるようになります。更には AI、IoT などのロボット・自動化技術の発展、情報化の進展は様々な職種・業務に影響を及ぼし、仕事そのものがなくなるものもあると言われています。2020 年以降の時代は、新たに企業にも個人にも否応なしに自己の変革を迫っています。変化に立ちすくみ立ち止まるのではなく、自らを鼓舞し、自身の道を切り開かなければならない時代が来たと言えます。

【 細井平州先生の教え 】

こうした変革期・激動の時代を迎える際、古典（先人・先哲）に学ぶことが肝要です。今こそ日本人が培ってきた『 恕（仁）の精神 』（相手の立場に立って考える、やさしさと思いやり。孟子のいう“忍びざるの心”）の持つべき心構えを学び、進むべき道を切り開かなければなりません。先人・先哲の 1 人に愛知県が生んだ偉人、儒学者細井平州先生がいます。右にある「勇なるかな」は平州先生が、江戸時代の名君との誉れ高い米沢藩主・上杉鷹山に藩主就任前に贈った言葉です。困難に立ち向かう鷹山に対し平州先生は、儒学でいう **3つの徳（智・仁・勇）** の中から、「勇」を第一として “勇気さえあれば、不可能なことはない” と勇気づけました。

【 上杉鷹山の藩政改革「 財政再建・産業育成・精神復興 」—平州先生の教えの実践】

鷹山が行った上記の 3つの改革にも平州先生の教えが色濃く映しだされています。平州先生は「ケチと儉約は違う」と唱えました。ケチも儉約も節約ですから余りが出ます。「ケチ」は余らせたものを「自分のために」使い、「儉約」は「他人のために使う」と唱えました。鷹山もまた節約を奨励し財政再建を進めるとともに、余ったお金で産業育成を図りました。今の経営に置きかえれば客のために先行投資や設備投資をすることです。したがって儉約とは「積極経営」を意味します。

そして鷹山は精神復興の礎の場として藩校を建て、その名を平州先生が「“譲る” という徳を興す学校」という意味を込め「興譲館」と名づけ、「心の壁を打ち破る改革（意識改革）」の場としました。又鷹山が藩政改革の際に藩全体に起こした「火ダネ運動」も平州先生の「遺草」にもある改革論の柱、「人の気持ち」が織り込む大切さを旨とする運動です。そして”成せばなる、成さねばならぬ何事も成らぬは人の、なさぬなりけり” の言葉通り、藩政改革の大業を成し遂げました。

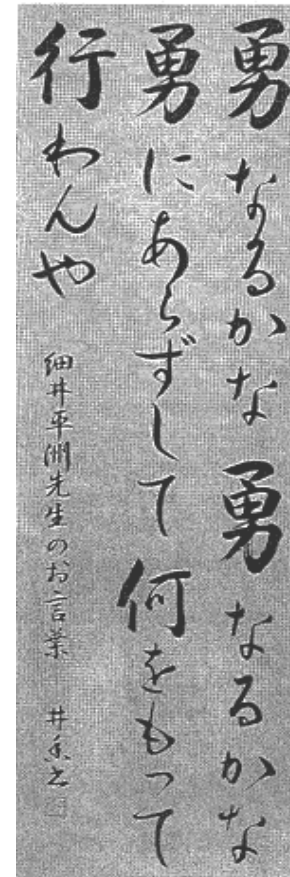
< 火ダネ運動 — 心の火ダネを起こせ!! >

「鷹山は、ある時火鉢の灰をキセルでかき回すと、中には炭火の残り・火ダネがあり、火ダネさえあれば火の連続性や継続性が保てることに気付いた。自身がまずその火ダネになり部下に移し、それを 1 人でも多くの人へ移せば、やがて城の外に出て町や村の人々の胸に火を起こし、それが改革のパワーとなることを考案しました。又鷹山は自身の「心の壁」を破壊できる人が勇気ある人といい、火ダネにより心の壁を打ち破ることで、優しさと思いやりという精神復興の大改革を成し遂げました。」

当社としましても皆様のお役に立てる企業となり、「恕の精神」と「勇」を持って、新たな時代も皆様と共に切り開いて参りたいと思いますので変わらぬご愛顧の程、宜しくお願い致します。

— 細井平州先生の教え(名言・格言) —

◆ 「勇なるかな 勇なるかな 勇にあらずして 何をもって行わんや」



米沢藩主上杉治憲(鷹山)公の初のお国入りのときに、平州先生が贈った言葉。

「藩主となるあなたに、大事なこと、お手本にしたほうがよいと思うことはすべて教えました。藩の人々の暮らしを立ち直らせて、豊かにしていくためには、まずみずからが身を正しく修めて、絶えず努力して、自分の信じるところをつらぬいていかなければなりません。こうしたことは、勇気あるものだけができるのですよ。

勇気ですよ、勇気ですよ、勇気なくして、どうして政治ができるでしょうか。

いよいよそのときがやってきたのです。」

治憲十九歳のとき

書は小林井香氏で、『平州絵巻』の詞書。

◆ 「学思行(がくしこう) 相まって良となす」

《学んだことを、よく考え、そして実行して、はじめて学んだという。》

学問をするということは、知識を得るためだけのものではなく、学んだことを生活に生かして、より良くしていくことであると説かれた。また、学問と今日とは二途にならざるように(学問でしたことと現実とが別々にならないように)とも説かれた。

◆ 「先施(せんし)の心」

先施とは、自分から先に行くこと。相手からの働きかけを待つのではなく、自分の方から相手に働きかけていく心持ちが大切であるということ。「自分から進んで働きかけることで、相手の心を動かすのです。」と平州先生は常々説いた。

< 細井平州先生の略歴 >

尾張国知多郡平島村(現在の東海市)の生まれ。江戸時代の折衷学派の儒学者。45歳のころ、まだ江戸にいた14歳の鷹山の師となり、鷹山が財政再建、産業育成、精神復興という藩政改革に着手した際には様々な助言を行う。藩校「興譲館」の創設にも尽力。後に江戸御三家筆頭・尾張家に招かれ藩校「明倫堂」(現・愛知県明和高校)の督学(学長)に就任。